

講演抄録：贅沢は敵か？

写真家 都築響一

LECTURE: IS LUXURY OUR ENEMY?

Kyoichi TSUZUKI, Photographer

On April 5, 2008, a lecture titled “Is Luxury Our Enemy?” was given by Mr. Kyoichi Tsuzuki at the National Museum of Modern Art, Kyoto. During this lecture he introduced a variety of people who maintain distinctive lifestyles with exceptional commitment. Mr. Tsuzuki told the audience about various diverse lives such as that of an amateur nude photographer who advocates the “principle of taking a lot of photos even if they are unexceptional,” a former philosopher who dresses as a woman to make self-portraits, a man committed to living in hunting-gathering mode in a pit house in order to experience Jomon period life, a Chinese noodle shop owner who is devoted to police dog training, a female Japanese ballad singer who spends most of the month in a customized car, traveling throughout the country for her music performances, and a man whose reason for living is cliff diving and who spends most of the daytime diving. Mr. Tsuzuki said that the people he introduced in the lecture meeting did not listen to advice from their friends or acquaintances but did what they wanted, in their own ways. They have their own ways of enjoying their lives, that is, how to live a luxury life. Probably we can say that the most luxurious thing is to bet your one life on an extraordinary thing. Mr. Tsuzuki’s ended his lecture by offering a new viewpoint of luxury.

KCIは2008年4月5日、京都国立近代美術館で「贅沢は敵か？」と題する都築響一氏の講演会を開催した。これは、2009年4月11日より同館で開催する展覧会「ラグジュアリー：ファッションの欲望」のキックオフ企画として2007年11月より開催した、全4回の連続オープンセミナー「ラグジュアリーの本質」の第3回講演会である。その他の講演者は松岡正剛氏（第1回「粋と奢り」2007年11月10日）、北山晴一氏（第2回「贅沢と顕示：19世紀の西欧を中心に」2008年1月19日）、稲垣直樹氏（第4回「虚飾の快樂と悲劇：20世紀のパラダイムとイヴ・サン・ローラン」※2008年6月28日）。本稿は、この講演会の記録である。都築氏は講演で、これまでに取材した数多くの人々を紹介してくれた。それぞれが非常に個性的な生き方を歩んでおり、登場した人物すべてをここでも掲載したかったが、文章量、プライバシーなどの観点から、本稿では多くを割愛することとなった。

※稲垣氏の講演内容はご本人の編集で「『空疎な天才』イヴ・サンローランの偉業：21世紀のパラダイムを予見する快樂と悲劇」と題して第54号に掲載。

僕のやった仕事を見ていただいている方もいると思いますが、僕とラグジュアリーって最も結びつかないものだと思います。今回の連続セミナーで出演される他の3人の方は、知的なラグジュアリーという

のを絵に描いたような方たちですが、僕はめちゃくちゃ違うと思います。贅沢というものには縁がない生活を悔しながら送ってきたので。

僕は自分のことをアーティストではなくて、ジャーナリストだと思っています。みんなも、どこかへ行って面白いものがあったら、その後、友だちと居酒屋で、「ねえ、見て見て」とか、「聞いて聞いて」ということがあるじゃないですか。それをメディアのサイズでやりたいというだけです。伝えないとなくなってしまうという切羽詰ったものもあるので、そういうものを中心に、今までちょうど30年間ぐらいやってきました。

その中で、ここ数年、世間から見たら全然ラグジュアリーではないけれども、本人の意識としてはすごいラグジュアリーというか、「一人脳内贅沢空間」に住んでいるような方たちに会うことが多くありました。それが、若い元気な子だったら「まあ頑張れよ」という感じですけども、70代、80代、90代の元気なじいさん、ばあさんたちに会うと、本当に打ちのめされます。自分はなんてつまらないことを気にしていたんだ、と感じるわけ。

そういう方たちが、ラグジュアリーの本質を突いた生き方をしているのかな、という気もしまして、今日はそういう話をしていきたいと思います。

(ここでは割愛したが、性器の蠟人形の製作を依頼する老人とそれを製作する蠟人形師、90歳を超える現役AV男優の話が紹介された。)

大阪ですごい老人と知り合いました。北村公さんという人です、今まで会った中で最もお金持ちの1人で、池田の方にすごい豪邸を持っています。この人の趣味は写真です。

北村さんを知ったきっかけは、以前、『アサヒカメラ』誌上で、大竹伸朗君というアーティストの友だちと一緒に、それまで掲載されなかったアマチュアの方の投稿写真から自分たちなりのベストを選ぶという企画をしたのですが、そこで1位にした2人のうちの1人が北村さんでした。この企画、「神様はボツに宿る」というすてきなタイトルで、「毎年恒例にしよう」と言ったまま音信不通。結局、1回で終わりました。彼からすれば「ようやく理解者現れる」ということで、掲載後すぐ手紙が来て、以来、文通をするようになったのです。

北村さんがどうすてきかという、写真ももちろんすてきなのですが、写真についての固い信条を持っているところです。1970年代に写真用の貸し画廊で何回か個展をやっていて、その時、細江英公さんやアラキーなど、いろいろな著名カメラマンにも見もらったそうです。

とてもいいアドバイスをたくさんもらったそうですが、特に心に残ったのは、「君はたくさん写真を撮っている。それはいいけれども、たくさん撮る中から1枚傑作を作るという、一点傑作主義ということをもう少し考えなさい」という言葉でした。非常にまっとうな助言をもらって、北村さんはカチンときたと言うのです。一点傑作を作るということは商売の、プロの発想だろう、と。要するに、いい作品を作るということは、それが評価されて、その後の仕事につながるという、評価を前提とした制作態度で

す。その助言を聞いて、北村さんは「おれはその反対に一生かけて駄作の海に沈没する、駄作羅列主義で行こうと決めた」と言うわけです。

それを聞いて、「すごいな」と思いました。僕も一応プロの写真家ですが、それはプロが最も懂れて、最もできないことです。そう言われたら、もう返す言葉もない。アマチュアのみ許された至高の世界です。そして、作品を見せられてノックアウトされたわけ。「これ、何ですか」みたいな。「いや、ヌード」「それはわかるんだけど、この袋は？」みたいな。

僕たちがヌード写真を撮る場合、顔を出してはいけないとなれば、印刷でモザイクや黒い目線で隠すなどしますけれども、この人の場合、最初に撮る時から顔を隠していれば安心だろうという実用的な目的で袋をかぶせる。それが出来上がってみると異様な写真になっているわけです、これはこれでみんな笑いを取っているだけですけれども、これが5メートルぐらいのプリントになって、ダーツとその辺にあって、外人の名前が付いていたらやっぱり笑わないわけです。褒めれば褒めるほど北村さんは「そうですか」みたいな感じで、「いや、顔を隠しただけなんですけど」みたいな。このずれがたまらないのです。

僕たちプロが撮るヌード写真でこれに近いものという、例えば荒木（経惟）さんなどがいますが、「アラーキーの写真」を見て、僕たちはやはり欲情します。それが彼のサービス精神です。つまり、荒木さんがどうモデルさんを見ているか、モデルさんは荒木さんをどう見ているか、2人の関係が写真からにじみ出す。それがプロの技術なのです。それを見る者が感じる。そういうコミュニケーションなのです。しかし、ここにはそういうコミュニケーションはない。ただ撮っているだけという、意図が全くわからないという感じです。

色物ばかりやっているとと思われるので、最近有名な人も1人ご紹介します。チェコの作家、ミロスラフ・ティッシーという人で、『芸術新潮』でも特集が組まれましたから、知っている方もいると思います。

南フランスのアルルで、毎年夏に世界で一番大きな写真のフェスティバルが開かれます。3年ぐらい前になりますが、僕も呼ばれて1つ展覧会をしたのですが、そのすぐそばで彼も出展していました。白い大きな壁に、横がせいぜい30センチぐらいの小さな作品が手作りのボール紙の額に飾られて、おしゃれだな、と見ていました。すると、この写真と一緒にショーケースがあって、すごく汚い黒い物体が並んでいたのです。これは何だろうと思って見たら、手作りカメラだったのです。

僕はびっくりして、いろいろ聞いて回りました。この人はもともとチェコの田舎町出身で、アーティストになるためにプラハの美大に進んだのですが、ちょうどその頃、「プラハの春」という有名な事件を経験したそうです。社会体制が変わって、それまでは、ヌード・デッサンの時間というときれいな女のモデルさんだったのが、突然、中年の労働者の裸を描かされるようになってしまった。それがすっかり嫌になってドロップアウトしたというのです。その後、故郷の小さな村に帰ると、ぼろぼろの小屋に住みついて、洋服も洗わず、半分ホームレスのような生活をするようになってしまったのです。

唯一の趣味は「きれいな女」です。ですが、風貌からして女の人には全然近づけない。それで、しょうがないから写真を撮りたいと思ったわけです。しかし、金はない。普通はそれであきらめるのを、こ

の人は、じゃあ自分でカメラを作ればいい、とってしまったわけです。

フィルム巻上げは糸巻き。フィルムと印画紙だけは買いますが、あとは全部自作。女の人を撮るといっても近づいて撮れませんから、望遠レンズが要ります。その辺からパイプを拾ってきて、老眼鏡のレンズをはめ込むと、望遠レンズに変身です。

写真を印画紙に焼くときも、金はないから小さいもので丹念に焼く。焼くには引き伸ばし機が必要ですが当然ありません。それで、ブリキ缶を拾ってきて、裸電球を1個突っ込んで、老眼鏡のもう1枚のレンズをそこにはめると引き伸ばし機が完成。それでプリントする。

これはすごいと思いました。かなわない。みんなかなわないと思ったらしくて、その年のフェスティバルのグランプリに輝いたんですけれども、パスポートがないからなのか、本人出席せず。世界で一番有名な写真フェスティバルで、受賞者不在のまま授賞式という華々しい祭典が行われたのは、僕としては非常に印象深いものでした。

僕でも同じように写真を撮って、Photoshopなどで簡単に似た作品を作ることはできます、でも、そこにはスピリットがないわけです。

(講演では、日本の雑誌のグラビア・ページから気に入った女性の写真を切り取り、別の雑誌へコラージュすることにのめり込む台湾の96歳の男性、大阪で女装をしながら教室を開く老陶芸家が紹介された。)

この方が面白いでしょう。宮間（英次郎）さんです。この人は最近、アウトサイダー・アーティストとして注目を浴びていて、滋賀県の近江八幡にあるアウトサイダーアート専門ギャラリー「NO-MA」や、スイスのローザンヌ（アール・ブリュット・コレクション）の展覧会に参加しています。撮影したのは、横浜の寿町というドヤです、寿町というのは東京の山谷、大阪の釜ヶ崎と合わせて日本の三大ドヤと呼ばれるところです。そこに住んでいるおっさんなわけ。おっさんといっても、もう70歳以上ですが。

全国のドヤを流れ歩いて、数年前から寿町に住み着いているのですが、この人は帽子アーティストです、すごい帽子を作っては、それをかぶって町を歩く。すぐそばの中華街に日曜ごとに出没したり、電車に乗って原宿まで行ったりもします。

帽子にはいろいろバリエーションがあって、ペットボトルを使ったり、金魚を泳がせたりしている。「すごい！これ」って感じ。大掛かりな作品もありますが、この人は髪の毛が長いので、それをポニーテールのように長くして、帽子に取り付けた支柱にくぐらせてずれを防ぐという、素晴らしい方法まで考案しています。ドヤに住んでいるぐらいなので、金がないから何も買えない。その辺から拾ったもので作っています。

宮間さんの部屋は3畳1間。これが彼のすべての空間です。立ち上がることもできないような狭いところで天井は低いけれども、これが彼の小宇宙というか、ここで寝て、起きて、それから制作もしている。だから、「広いところがない」などと言っているアーティストのやつは何をほざいているんだ、という

感じます。ドヤでもできるだろうと。

「なぜこんなことをやっているのですか」という話に当然なるんですが、もともとは超人見知りだったそうです。人見知りとは対極にあると思うのですけれども……。赤面症、対人恐怖症というのか、人とちゃんと接することができなかつた。それで仕事もなく、ドヤ住まいすることになった、ということもあるわけです。

例えば、電車に乗っている時、彼がこういう帽子をかぶって乗ってくる。そうすると大体、子どもはすごく興味を示します。一緒にいる母親は100%、「あっちを見ちゃいけません」と言って、ぐいぐい引っ張って子どもを下ろす。でも、子どもはこちらを名残惜しそうに見ている……。

世の中には言いたいことも言えず、シャイなために何もできずに我慢している人はすごく多い。宮間さんは自分のことを「おじさん」と言うんですが、「おじさんみたいな人だって、やろうと思えばこういうふうにはできるんだよ」というメッセージを伝えたくて作品を作っている、というのです。そうやって寂しい若者たちに勇気を与え続けている。こういう人は本当にすごいなと思います。

女装マニアのおじいさんと知り合いました。この人は自費で自分の女装作品集まで作っています。それを僕が偶然買い求めて、コンタクトをとったんです。この人はもともとすごい大学のすごい哲学者で、しかも研究対象がウィトゲンシュタイン。ウィトゲンシュタインの研究では日本一と言われていた人です。その人がバブル期に株で当てて、ウィトゲンシュタインはもういい、と。その程度のものであったのかと思いますが……。自分の一番好きなことに正直に生きようということで女装マニアになり、株でもうけた金で悠々自適しながら女装に取り組んでいるわけです。自分で作品も作る。

自分で選んだ衣装で、自分でメイクやって、どうなるかという、すごいきれいというか、まあきれいです。今75歳ぐらいなのではないかな。自分でウェブサイトを作っていて、ほとんど毎週、更新しています。自分で撮影もしています。

この人も最初は「えー」と言っていたのを、「お願いですから、取材させてください。原稿なども全部チェックしていいですから」と言ったら、「いいけど、1つ条件がある」「何ですか。何でも聞きます」と言ったら、「じゃあ、写真を撮ってもらうのはいいけど、そのあと、チェックさせろ。きれいに撮れていたら載せてもいい」と。僕も一応プロなんですけど……。「わかりました。きれいに撮ります」「それと、もう1つ条件」「何ですか」「しわなどを修正させろ。」僕もいろいろやっていますが、修正しろと言われたのは初めて。普通だったらカチンとくるところですが、「わかりました、何でもやります。」

この人は写真には素人です。でも、写真集を出すに当たって、撮ったデータをPhotoshopで修正してくれるスタジオを自分で探して、持ち込んで、ここのしわを取れ、みたいな指示をプロの修正マンに出して、それできれいにした写真を使って自分で写真集を作る、という、すごいエネルギーの人なのです。もちろん、いまだに現役で、山咲真由美さんという芸名でウェブサイトもあります。きれいな写真がたくさん見られますから、Photoshopの素晴らしさもわかってくれると思います。

(他にも破天荒な老人として縄文時代の生活を体験するために自作の竪穴式住居で狩猟・採集生活を続けた男性や警察犬の育成にのめり込んだラーメン店主が紹介された。)

今気合を入れている連載に演歌をテーマにしたものがあります。『月刊カラオケファン』という雑誌です。カラオケ演歌雑誌というのは全国に4誌あって、その中では一番売れているそうです。公称10万部。ちょっとたたきすぎだろうという感じですが……。

連載は「わが家へようこそ♪」というコーナーで、売れない、というか、とても頑張っているけれども、まだ結果がついてこないという方たち取材しています。そういう方たちは、東京近郊に営業上住むことが多いので、お家へ行って、ステージ衣装に着替えてもらって写真を撮る。初めは、たった2ページの連載なので、大型カメラでバーンと大きい写真を1枚撮って、500~600字の紹介文をつけようかなと思っていたのですが、毎回めっちゃくちゃいい話なのです。いつも5,000字ぐらいになっていて、編集者に「もう入りません!」と言われます。「字を小さくして入れろ」と言っても、平均購読者年齢が70歳ぐらいなので、「小さくなりません!」みたいな。もう毎月困っています。それくらいいい話だけです。

(以下、紹介された4名の演歌歌手の話からの抜粋)

江東区、東京の下町に住む秋山涼子ちゃんです。本名でやっています。

高校生の時、非常に頭がよくて、周囲も期待したし、本人もその気になって医学部に入ろうと勉強をしていたんですが、高2ぐらいの時に隣の家がガス爆発を起こして自分の家も延焼してしまったのです。一家5人焼け出されて、小さなアパートに仮住まいをしていましたが、「お金を払って医学部に行くより、もともと歌がうまくてちびっこのど自慢で優勝したこともあるから、歌手になって、早く家族のために家を建てよう、と思ってしまったんです」と言うわけ。「失敗でしたけど」という話です。それはお医者さんになったほうがよかったのかなと思いますが……。

彼女の歌声にはソウルがある、とほれ込んだ作曲家のおじさんがいて、自分の仕事を投げ打ってマネージャーとなり、涼子ちゃんの作詞・作曲を手がけ、運転手までも手がけるといふ、二人三脚体制をとるようになりました。

テレビ局などには相手にされません。そこで「涼子号」というバンを造りました。もともと実家が板金屋さんなので、後ろにベッドを作って、マネージャーが運転して、彼女はそこで寝る。カラオケ喫茶に行ったり、健康ランドに行ったり、車中生活を続けながら全国を流すという生活です。それで、1ヶ月に2回ぐらい、補給のために東京に2、3日、帰ってくる。車中で暮らしながら演歌を歌って今年で確か21年目。これをブルースマンと言わずして何と言うのでしょうか。

世の中には売れないロック野郎やヒップホップ野郎が多くて、「時代がわかってくれない」などと言っていますが、そんなことを言うよりも、20年、車中で生活しながら全国で歌いまくって、それでもウケ

なかったら文句を言えと、僕は思うわけです。

最後に、関西ではいまだに異様な人気を誇る『探偵！ナイトスクープ』で20年ぐらい前に放映した「ドリーおじさん」こと斉藤さんの話をして、おしまいにしたいと思います。

この人は独身です。東京の世田谷生まれで、今、70歳ぐらいです。海が好きで、最初は潜るほうのダイビングをしていたんですが、死にかけまして、次に遠泳にはまって、帰ることを考えずに泳いでいたら帰れなくなって死にかけて、それで崖から飛び込むダイビングに変えた、というわけです。

就職もせずに、その場その場で仕事を探しながら、日本各地の理想的な崖というものを探していた。そうして十何年かけて行き着いたのが、北陸の東尋坊。あの辺は温泉地ですから、朝や夜にお客さんを送迎するバスの運転手になって、ゴールデンウィーク明けから秋まで、昼間は毎日飛び込みに懸ける「飛び込み人生」を始めてしまったのです。

飛び込んだ回数は、5、6年前に9万2,500回までいきました。10万回まであと7,500回というところで、今までの無理がたたって、強度のヘルニアになってしまい、お医者さんにも、とにかくそんなばかなことは一刻も早くやめろ、と言われドクターストップがかかった。すべての希望を失って、「潜水艦が沈みっぱなしになったような気持ちでした」と言うくらい生きる気力もなくなっていたところ、何も考えずに入った健康ランドに通い込むうちに健康になってしまったというのです。健康ランドで本当に健康になった人というのは初めて聞きました。飛び込みも、また本格的に始めて10万回の大台に乗せようと思っているそうです。

これを見ていれば笑いはとれますが、しかし、尊敬はされない。でも、この人は飛び続けているわけです。それがすごいんです。

今回いろいろお見せした人たちというのは、言ってみれば、全員、崖から飛んでいる人たちです。東尋坊に行ったことがある人は多いと思うけれども、本当に怖いところです。しかし、もしこれを飛んだら、すごい危険だけれども面白いことが待っているかもしれないという時に、制止を振り切って飛んでしまう人たちというのがいる。大抵は尊敬されませんが、でも、人生、最終的に勝ち組というのはこういう人たちのことをいうのかもしれないかもしれません。死ぬ5秒前に、「ああ、面白かった」と言える人と、「金とかいろいろゲットしたけど、本当はミュージシャンになりたかったんだよなあ」と思って死ぬのと、どちらが勝ち組かということです。

こういう人たちは全員、やりたいことを好きにやっている。やりたいことを貫くということは一体どういうことかということ、周囲の忠告に耳を貸さないということです。「贅沢に生きる技術」というと無理やりかもしれませんが、楽しく生きる技術として、僕はこういう人たちから学ぶことは、いかに人の言うことを聞かないでいくか、ということです。

僕が50歳を過ぎてわかったことは、人の言うことを聞く姿勢というのは20歳ぐらいまでで、後半生に僕たちが学ばなければいけないことは、いかに人の言うことを聞かないでいくかということです、人の言うことを聞かなければ、友だちをなくすし、尊敬はされない、嫌がられる、金はもうからない、いろ

いろいろあります。しかし、そういうものを振り捨てながら、人の言うことに耳をふさいで突っ走っていく技術は、一番贅沢で、はるかに僕としては見習いたい、いい生活だなと思います。

すごくお金を持っていて、すごく趣味がいい人が、例えば、お茶室を作るとか、いい服を着るとか、プライベートジェットを持つとか、そういうラグジュアリーな生活をするというのは、それはどうしたって金なわけ。本当にすごいのは、金がないけれどもやるやつなのです。お金を持っている人が金を使うのは贅沢でも何でもありません。自分の予算の範囲内でやっているだけですから。

そうではなくて、予算がないのにやってしまう。1回しかない人生をとんでもないことに懸けてしまうことほどの贅沢はないということは、今回お題をいただいて、考えついたことです。僕の話なんかはどうでもいいんですが、斉藤さんの「ドリャー」の一声を心に留めておいていただけたら、結構、人生を踏み外せるのではないかな、と思うのです。

長い時間、どうもありがとう。

都築響一（つづききょういち）

1956年、東京生まれ。76年から86年まで「ポパイ」、「ブルータス」誌で現代美術、建築、デザイン、都市生活などの記事をおもに担当する。『ROADSIDE JAPAN』で第23回木村伊兵衛賞受賞。現在も日本および世界のロードサイドを巡る取材を続行中。主著に、全102巻の現代美術全集『アート・ランダム』、『Tokyo Style』、『珍日本紀行』、『ストリート・デザイン・ファイル』（全20巻）、『賃貸宇宙』、『イメクラ IMAGE CLUB』、『珍世界紀行 ヨーロッパ編』、『夜露死苦現代詩』、『バブルの肖像』、『性豪』、『誰も買わない本は、だれかが買わなきゃならないんだ』、『Happy Victim 着倒れ方丈記』、『ぼろ』他、多数。

（※肩書は掲載時のものです。）